

---

# 頼むからパパのことを聞いてくれ！

村雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

頼むからパパのいうことを聞いてくれ！

### 【Nコード】

N7200Y

### 【作者名】

村雨

### 【あらすじ】

ありえない死に方をしてしまった俺。

死に方が面白いという理由で転生！？

もらった能力は二つ。でもそのうちの二つはこれから行く世界では

まったく使えない！？

まあがんばって生きていこう

更新は不定期です

## プログラグ的なもの（前書き）

初投稿です。

すごく短いです。まあいろいろおかしいところがあると思いますが  
大目に見てください。

感想待ってます。でもあまりひどいことは書かないでください。  
誤字脱字あったら指摘してください。

## ブローグ的なもの

…ここはどこなんだ？

俺が意識を取り戻すと目の前に幼女がいた。

…なぜに幼女？

「あつ、やっと気がつきましたか」

いや、なんでこんなところに幼女が居んの？

「ああ、そういえば自己紹介がまだでした。私は神さまです。

そしてあなたにはラノベの世界へ転生してもらいます」

は？転生？何で俺が？っていうか俺死んだの？

「はい、死んでます。あなたが選ばれた理由がそれです。思い出してみてください」

えっと、俺は一人で暮らしていたはずだ。

んで、会社の同僚と飲みに行く約束をした。

そして出かけようとして筆筒の角に左足の小指をぶつけたんだ。

…ん、こっからの記憶がない！？まさか俺は筆筒に足をぶつけて死んだのか！？

「いえ、違います。実際はそのショックにより気絶。

そして運悪く卓袱台に頭をぶつけて死亡しました。」

よかったよかった…ってどっちもどっちじゃねーか！

ん、さてよ、まさか俺が選ばれた理由これ？

「はい、そうです。あなたの死に方が面白かったからです」

おい！適当すぎだろそれ！

「まあいいじゃないですか。どうせ家族も居ないんだし」

…まあそうだが。…仕方がない、どこの世界に行くか教えてくれ

「それは内緒です」

…は？内緒？

「でもその代わりに好きな能力を二つあげましょう」

じゃあ一方通行のベクトル操作能力と黄金率をくれ

「分かりました。それではがんばってください」

最後にひとつだけいいか？

「何でしょう？」

結局俺はどこの世界に行くんだ？

「…まあいいでしょう。教えてあげます。」

それは『パパの言うことを聞きなさい』です」

おいそこベクトル操作意味ねえだろ！

「家事全般は一流以上にできるようになってます。  
それでは今度こそいってらっしゃい」

「まあぐだぐだ言ってもしょうがない。行ってきまーす」

俺は目の前に現れた扉からでていった。

## 小鳥遊家での出来事（前書き）

今回も短いです。長いのを書いている人のすごさが  
小説書いてみて初めてわかりました。  
誤字脱字あつたら指摘してください。

## 小鳥遊家での出来事

え〜突然だが、俺が転生してからもう20年もたった。

なんだって？時間が飛びすぎ？だってとくに何もなかったんだから仕方がない。

本当に何もなかったかって？うーんそうだな

俺が生まれてすぐに両親が事故で死亡。

親類がいないんで孤児院に預けられるところだったのを親父の親友の瀬川さんが引き取ってくれ、俺は瀬川海斗になった。

それから一年位たって祐太が生まれた。両親はもちろん祐理姉や俺もすごく喜んだ。

それから数年たって父さんと母さんが死んだ。んでそこから大体原作通りなはずだ。

まあ原作と違うところといえば、俺の黄金律で金には困らなかつたし

あの幼女のおかげで家事ができたから祐理姉の負担を減らせた。

後は祐理姉の趣味を偶然知ってしまい、強引に引きずりこまれオタク趣味を持つようになった。

まあ前世でも少しはオタクっぽかったからよかつたが…

まあそんなこんなでいろいろありもう原作は覚えていない。

まあいいか。精一杯がんばって生きていこう。

俺がこんなことを考えながら歩いていると目の前に表札があった。

「おお、これが小鳥遊家か」

俺はそんなことを言いながらインターフォンを押す。

「いらっしや〜い、海斗おいたん」

そこには祐理姉とその娘ひながいた。

「遊びに来たよ祐理姉、ひな」

「そういえば祐太はどうしたの？」

「ああ、祐太なら用事があるとかで大学にいった」

「そう、残念ね。祐太をいじって遊ぼうと思ったのに」

「はは、また今度にしてあげなよ」

そんな話をしながら俺たちはリビングに向かう。

そこには空ちゃん、美羽ちゃん、信吾さんがいた。

「いらっしやいお兄ちゃん」

「いらっしやい叔父さん」

「やあ、よく来てくれたね海斗君」

三人に迎えられた俺はそのままイスに腰掛ける。

「そういえば海斗、お昼ご飯食べたの？」

「いや、まだだけど」

「ちょうどよかった。一緒に食べましょ」

そういつと祐理姉はキッチンのほうへむかっていった。

「あつ、手伝ってきますね。信吾さん」

「ああ、たのむ。ひさしぶりに君と祐理の料理を食べたい」

俺は祐理姉を追ってキッチンに向かった。

「祐理姉、手伝いにきたよ」

「あら、待っていてくれてもよかったのに。まあ手伝ってもらいましょうか」

「何作るんだ？」

「ひなの大好きなハンバーグね。後はカルボナーラかしら」

「よし、カルボナーラは俺が作るから祐理姉はハンバーグ頼む」

「ふふっ、まかせたわよ」

「ああまかされた」

テーブルには出来上がったカルボナーラやハンバーグがのっている。

「わあ、どっちもおいしそう！」

「まったく、お姉ちゃんたら。まあほんとにおいしそうですけどね」

「ひな、はんばぐたべるー！」

「ほんとにおいしそうだね祐理」

「じゃあ、食べましょう」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「あーおいしかった！」

「お姉ちゃん食べ過ぎてない？」

「ななな何言ってるのよ美羽！！そんなに食べてないよお兄ちゃん  
！」

「えー、空ちゃんは俺の作った料理おいしくなかったのかな？」

「違います！おいしかったです！」

「ごめんごめんちょっとかわいかったからね」

「か、かわいい?……え、えへへ／＼／」

「あらあら、いいわねえ若いつて」

「ま、まあ海斗君ならいいんじゃないか?」

「な、なに言ってるのよお父さん!／＼／」

「じゃあそろそろ帰るよ。」

「もう帰っちゃうの?おいたん?」

「うん、用事があるからね」

「また来なさいよ海斗」

「今日はありがとう海斗君」

「さようなら叔父さん。また来てください」

「またね〜おいたん」

「また来てくださいねお兄ちゃん」

「ああ、また来るよ」

俺はそう言いながら自宅へと向かった。



## 路上観察研究会（前書き）

なんかいろいろおかしいですが、勘弁してください。  
今回も短いです。

## 路上観察研究会

「佐古先輩、菜香、遅れてすみません」

「やっと帰ってきたのかね海斗君」

「おかえり海斗」

あの後、小鳥遊家をでた俺は家に帰り、ここ口研にやってきた。

「今年はどうですか？」

「ああ、すでに一人入ったのだよ！」

「そうですか。んでそいつはどこに？」

「すまない。忘れていたようだ。菜香君、仁村君を呼んできてくれ  
たまえ」

「……わかった。」

何かを練習していた菜香は立ち上がり、新しく入った仁村を呼び  
にいった。

「佐古先輩、何か用ですか？」

「やあ仁村君、海斗君が戻ったから自己紹介してもらおうかと思っ  
てね」

「仁村浩一です。よろしくお願ひします海斗先輩」

「こちらこそよろしく。それと先輩はやめてくれ」

「分かりました。じゃあ海斗さんでいいですか？」

「ああ、それでいい。それにしてもなんで口研に？」

「いや、それがですね…その佐古先輩に無理やり…」

仁村がそう言ったとたん佐古先輩が慌て始めた。

「ぎくっ！ ななな、何のことだい？」

「…佐古先輩？ 人に迷惑かけたらいけないって言いましたよねえ？」

「ひっ、おおお落ち着くんだ海斗君、話せばわかる！」

「そうですね、O H a N a S h i ししょうか」

「い、いやだ、助けてくれ！ 菜香君、仁村君！」

佐古先輩はそう言うが、二人とも目を合わせようとしない。

「そ、そんな！ 何か言ってくれ菜香君、仁村君」

「……自業自得」

「ノ、ノーコメントで」

二人に見放された先輩はorzの状態で固まっていた。

「さあ、行きましようか先輩？」

「いやああああ！！！！」

先輩の叫び声が響き渡る。

「それで、今年入りそうなのはもういないのか？」

「……会長がもう一人いるって」

「そうなのか、俺はてっきり」「そうなのだよ海斗君！もう一人は酔っ払って寝ているよ。」「……」

先輩は今まで端っこに転がっていたはずなのに、急に会話に参加してきた。

とりあえず、なんかむかついたからもっかいボコっておいた。

路上観察研究会2（前書き）

遅くなつてすいません。

## 路上観察研究会2

「…それで酔っ払って寝ているやつはどこに居るんです？」

「もうそろそろ起きて来ると思うよ」

さっきぼこったばかりなのにまた先輩は復活してきた。

…ハッ、これがギャグ補正だともいうのか!?

まあどうでもいいが。

「あの～すみません。ここどこですか？」

ん？この声はまさか……

「おお、起きて来たようだよ海斗君」

「えっ、いま海斗って言いましたか？」

「……裕太、何でここに居るんだ？」

「あっ、海斗兄、海斗兄こそ何でここに？」

いやな予感が的中してしまった。

「俺はこの研究会のメンバーだ。裕太は？」

「いや、確か俺は居酒屋でコンパの最中だったはずだけど……」

「海斗君？つかぬ事をお聞きするが、その瀬川君とはどんな関係で？」

「どんな関係もなにも、裕太は俺の弟ですよ」

俺がそう言った瞬間、先輩は脂汗を大量に脂汗を掻き始めた。

「すみませんでした！！許してください！！！」

「…何したんですか？」

先輩から詳しい話を聞いてみると、どうやら裕太は仁村と一緒に連れてこられたらしい。

「まあ、いいです。それより裕太、お前このサークルに入るのか？」

「うーん、まあほかにあてもないし入ってみようかな」

「それに、海斗兄がやり過ぎないように見ておかないとね」

そう裕太がいった。まあ、確かにやり過ぎたかも知れないがそれは昔からのことではないか。そう思っていると

「ありがとう裕太君！！君には感謝してもしきれないよ！！」

「えっと、佐古先輩でしたっけ、なにかされたんですか？」

「それが、ちょっとドジって海斗君に……」

そこまで言ったとたん佐古先輩は何かを思い出したように

震えだした。

「ちよつ、大丈夫ですか先輩!？」

「先輩は海斗さんにお話されてたからね」

「……………自業自得」

「なるほど。海斗兄にお話されたのか」

裕太は先輩がおかしくなった理由がわかったようで  
仁村や菜香と話始めた。

「はじめまして。瀬川裕太です。これからよろしくお願いします」

「……………織田菜香。菜香ちゃんって呼んで」

「それはちよつと…菜香さんでいいですか？」

「……………ん、いいよ」

裕太はさつそく菜香のペースにはまってしまつたようだ。

「俺は仁村浩一。君がコンパのときに酔っ払っちゃつたんで俺が連れて帰つたんだ」

「そうだったのか、ありがとう仁村」

「というか裕太、お前酒飲んだのか」

「違います海斗さん、ノンアルコールビールだったんですけど…」

どうやら裕太はノンアルコールビールで酔っ払ってしまったよう  
だ。

「ま、まあいいじゃないか海斗兄、それより佐古先輩はどうにかし  
なくていいの？」

「大丈夫だ。いつものことだからな」

「いつものことって…佐古先輩大丈夫かな」

裕太は先輩の心配をしている。やさしいやつだな。

「裕太、そろそろ帰って飯にするぞ」

「わかったよ海斗兄。そうゆうことだから、仁村、菜香さんまた来  
ます」

「じゃあ、また今度」

「……ばいばい」

仁村や菜香に帰る事を告げて俺たちは家に帰った。

そついや佐古先輩どうしたんだろつ。……ま、いつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7200y/>

---

頼むからパパのことを聞いてくれ！

2011年12月15日03時49分発行